

名水、清流を生かした まちづくり



まつもと しげゆき
松本 茂幸
かんぎょう
神埼市長(佐賀県)



いなば たかひこ
稲葉 孝彦
こがねい
小金井市長(東京都)



ほりうち やすお
堀内 康男
くろべ
黒部市長(富山県)

司会・コーディネーター

ほそかわ たまお
細川 珠生

政治ジャーナリスト

地球は水の惑星ともいわれていますが、国際的に見ると、水不足が深刻な国も多数存在します。そうした水資源の重要性や直面する課題などを考える機会として、国連は2013年を「国際水協力年」に定めています。

座談会では、この「国際水協力年」に合わせ、名水、清流を重要な観光・産業資源として、観光やまちづくりなどにも活用している堀内康男・黒部市長、稲葉孝彦・小金井市長、松本茂幸・神埼市長にお集まりいただき、その環境保全や活用における取り組みの経緯や内容、その効果、今後の展望などについてお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)



野川

して平坦部の旧神埼町、旧千代田町の二町一村の合併により神埼市が誕生しました。その結果、まちを流れる「城原川」が、源流の脊振山系から、一級河川・筑後川下流に流れ込む河口部まで、市を貫くように、一直線に結ばれることになりました。また、下流には農業用水や排水路として利用されてきた、昔ながらのクリーク(水路)も数多く残っています。そうした環境ですから、地域住民は昔から水と密接な生活を送ってきました。かつては精米や穀物製粉のために、80基もの水車が使用されていたんですよ。こうしたまちの遺産を現在のまちづくりに生かそうと、水車群の復元、クリークを利用した公園などの整備、河川の親水事業などにも取り組み、平成7年には黒部市と同様「水の郷」(旧神埼町)の認定も受けています。

ダム建設により発生した環境変化への対応が課題。自然に負担を掛けない水資源の管理方法も模索すべきです。



堀内 康男
黒部市長(富山県)

「名水、清流」は都市の大事な資源
細川 日本は世界の中でも降水量が多く、安全でおいしい水が安定的に供給される、水資源に恵まれた国です。そのおかげで、私たちの生活は支えられてきたほか、農業・工業を



稲葉 孝彦
小金井市長(東京都)

水資源は環境の重要なバロメーター。小金井市ならではの美しい環境を次の世代に継承していきたい。

水資源をまちの発展に積極的に活用
細川 一言で名水、清流といっても、その内容は各都市によってさまざまです。それは、その水資源をどのようにまちの発展に生かしているのか、お聞かせください。
堀内 黒部川の水は、地域に計り知れない恩恵を与えています。例えば富山湾で白エビ



黒部川

はじめ、各産業が発展した歴史があります。本日は、そうした水資源を守り、有効にまちづくりなどに活用している都市にお集まりいただきしました。

それではまずそれぞれの都市の「名水、清流」の概要をお知らせください。
堀内 黒部市というと、山深い黒部奥山のイメージが強いかもしれませんが、黒部峡谷や宇奈月温泉が市域に加わったのは、旧宇奈月町と合併した平成18年からのことです。これにより、従来の黒部川扇状地や沿岸の平坦部に加えて、北アルプスの山岳部まで一体となった、新たな黒部市制がスタートしました。

この黒部市を南東から北西へ横断するのが「黒部川」です。延長85kmの一級河川ですが、3000m級の山岳地帯から一気に平野に流れ落ちる急流のため、長い年月にわたって洪水を繰り返しながら、下流域に広大な扇状地を形成してきました。

この扇状地内で浄化された地下水が、私たちが誇る「黒部の名水」です。全国でも水質はトップクラスと評価が高く、昭和60年には環境庁(現環境省)より「名水百選」に認定。また、平成7年には、こうした水資源を効果的にまちづくりに生かしていることが評価され、国土庁(現国土交通省)から「水の郷」の認定も受けています。

稲葉 小金井市は新宿から中央線で約25分。都心からもほど近い位置にありながら、豊かな自然環境に恵まれた都市です。その象徴が国分寺市を水源とする一級河川「野川」です。全長20kmほどの小規模な川ですが、市民にとっては自然を満喫できる大切な癒やし空間。川岸では1年を通してウォーキングやジョギングを楽しむ市民も多いですし、夏は子どもたちの格好の水遊び場所になります。

さらに小金井市は、その地名が「黄金に値する豊かな水が湧く」ことに由来するように、地下水も豊富です。実際、都内の自治体では珍しく、本市の水道水のおよそ70%は地下200mから汲み上げた水で、冷たくて水質も良好です。市民生活を支える資源ですから、みんながこの貴重な水を守っていこうと住民の意識も高いですよ。

松本 神埼市も黒部市と同じく平成18年に市町村合併を実施し、山間地域の旧脊振村、その業用水があつてこそです。
松本 神埼市でも水資源を農業・産業に生かしてきましたが、現在、特に力を入れているのが、クリークに自生する「菱」の商品開発です。菱とは日本やアジアの湖沼に自生する一年草のことで、この地域では以前から食べられてきた伝統食材ですが、これを原料にした加工品の生産を進めています。

平成21年度からは、この実を原料に地元の醸造会社と連携して、焼酎の生産を開始しました。さらに、産学官の連携により、菱の皮を生かした菓子開発にも取り組んでいます。連携協定を結んだ西九州大学が調査したところ、抗酸化作用のある「ポリフェノール」や糖尿病の予防が期待できる「アミラーゼ」などの栄養成分も検出されましたから、これらの効能を全面的にPRしていきたいですね。多くの支持を集めるためには、安定供給がカギになりますから、水田での菱の育成にも取り組んでいるところです。

稲葉 小金井市では、川の水を農業や産業に活用してはダメですが、野川や湧水の名所など、豊かな水環境そのものを、多くの人に楽しんでいただいています。都心で働いている市民も、職場から小金井市に帰って、豊かな

現在、産学官の連携の下、まちのクリークに自生する、地域の伝統的な食材である「菱」をもとに地域ブランドの創造に向けた取り組みをしています。



松本 茂幸
神埼市長(佐賀県)

自然環境に接することで、リフレッシュされているようです。
都心にも近く、行き来しやすいロケーションですから、市民だけでなく、周辺地域からも多くの人に訪れていただいています。わが

自然環境に負担を掛けずに生活環境を向上させる道を模索

堀内 今後は、いかに自然に負担を掛けない形で開発を進めるのかという視点も持たなければいけません。自然の摂理を無視して、人間が強引にコントロールしようとすると、かえって私たちの暮らしに大きな影響を与えてしまいます。

黒部川のこれまでの変化を見てもそれは明らかです。日本有数の急流であり、相当な暴れ川でしたから、かつては頻繁に洪水が発生していました。そこで、戦後の電力不足への対応もあり、水力発電所も兼ねたダムの建設が進められたわけです。

その結果、確かに治水、利水には効果がありました。周囲には大きな環境の変化が起こっています。ダム湖はもちろんのこと、黒部川上流には土砂の堆積が進んでいます。加えて下流域も、洪水の危険性は小さくなったとはいえ、土砂が供給されないために、浸食された海岸線が後退するのではないかと心配な状況になっています。自然の土砂の流れをダムでせき止めてしまった結果ですが、この環境変化にどう対応するかが、大きな課題となっています。

松本 なるほど、治水に大きな効果があったものの、自然に手を掛けることで、環境に変化が出てしまったということですね。実は、神埼市でも、市内を流れる城原川、田手川が天井川ですから、治水対策としてダム建設が計画されているところですが、あらかじめその影響を考慮する必要があります。黒部川流

まちの観光資源の一つといっているでしょう。**堀内** 黒部市でも「水」を観光資源として活用し始めています。特にわれわれが目しているのは、市の扇状地に自噴する湧水です。地元では「清水」と呼んで、昔から炊事や食べ物の冷やし場所として「共同洗い場」があり、今ではこれをまち歩き観光のスポットに活用しています。当初は、「こんなものが観光資源になるのか」と地域の住民も半信半疑でしたが、都会からお出でになる観光客の方々からは「地域の生活文化に触れられる」と好評。今では住民の皆さんも非常に熱心で、ボランティアガイドを務めてくださる方もいらっしゃいます。

市民を巻き込んだ名水、清流の保全活動

細川 水資源を有効に活用できるのも、きれいな水環境が保たれているからだと思います。



各都市では貴重な財産である清流、名水をどのように守り、向上させているのか、その取り組みについても教えてください。
稲葉 小金井市の野川は今でこそ、良好な環境が保たれていますが、高度成長期の昭和40年ごろは、公共下水道が未整備だったこともあり、生活雑排水が流入していました。そのせ

域ではどのような対策を取られているのですか。

堀内 流れていた土砂をせき止めたことが原因ですから、もう一度土砂を下流に流して、少しでも本来の状態に近づかせることが重要です。そこで平成13年から、黒部川で進められているのが世界的にも珍しい「連携排砂」です。複数のダムで同時にゲートを開けて下流に土砂を流すというのですが、大きな効果があります。もともと、初めて排砂した当時は、ダム湖に10年近くたまった、腐敗した土砂を流したものですから、流域には相当なダメージもありました。現在ではかなり負担を軽くした排砂の仕方が分かっています。今後は連携排砂を進めていかなければならないと思います。



稲葉 小金井市でも、下水道が整備されたおかげで、随分市民の生活は便利になりましたが、逆にそのせいで雨水が地下に浸透しにくい状況になっています。これはわれわれにとって大きな問題です。野川は湧水が源泉の河川ですから、地下水が少なくなると、水量も減少してしまいます。そこで、小金井市では、昭和63年以来、雨

いで汚染が進み、当時はまるでどぶ川のような状態でしたよ。

その後、公共下水道が整備されて、少しずつ浄化されてきたのですが、さらに市民の側から「もつと河川をきれいにしよう」との声が上がり、美化活動が進められた結果、すっかり清流が復活しました。やはり、自然環境の保全・向上には、市民の協力が欠かせません。

堀内 黒部川は、全国の一級河川を対象にした水質調査のランキングでも日本一の常連。さらに、「名水百選」や「水の郷」の認定も受けていますから、名水を守っていこうという、市民の意識はかなり高いですね。昭和62年には「黒部名水会」が発足し、水に関する提言、講演会や名水茶会の開催、環境整備へのお手伝いなどを行っていただいています。

さらに平成4年から、将来を担う子どもたちを対象にした「黒部水の少年団」も活動を始めました。毎年、多くの子どもたちが自主的に参加し、黒部川の水生生物調査や清掃奉仕活動、自然観察、湧水群調査を行っています。**稲葉** まちに川があると、子どもたちに対して、体験を伴った教育活動ができる方がいいですね。小金井市でも、子どもを対象に野川流域の昆虫や魚の観察会などを実施しています。

松本 小さいときから水に親しむことは、環境保全においても、水事故の防止においても非常に大事なことです。特に水遊びは絶対すべきですよ。小さいときから川に入って遊んでいれば、おのずと水の怖さも身に染みて分かってくる。それが結果的に、水に関する事故の防止にもつながるのではないかと思います。

水を地中に浸透させる「雨水浸透施設」の設置を進めてきました。「雨水浸透ます」「雨水集中浸透人孔」「雨水地下浸透管」の3種類がありますが、特に多く設置されているのは「雨水浸透ます」です。助成金交付制度も設けていますが、現在は市内で設置可能な建物の約6割で設置されています。この市民協働の取り組みが評価されて、平成13年には「第3回日本水大賞」のグランプリを受賞しました。

松本 神埼市における大きな課題は、クリークの法面の崩落です。特に土地改良事業で作られた土水路の法落ちがひどく、多くのクリークで早急に復旧工事をする必要があります。



城原川



細川 珠生
(政治ジャーナリスト)

一方で、山間地域の脊振町では高齢化と過疎化が進み、山林の荒廃が進んでいます。木材の価格低落により、林業経営自体がまったく成り立たない状況です。

この対策として、今年から県の事業として進めているのが、脊振町の間伐材や孟宗竹を利用したクリークの木柵工事の推進。地域の環境保全を図りながら山間地の活性化も目指す、一石二鳥の取り組みです。

水資源を将来のまちの発展に生かす

細川 各都市では水資源を掛け替えない財産として、その活用・保全に取り組みられています。しかし、さらに将来にわたって、どのようにまちづくりに生かされていくかと考えられているのか、今後の展望をお話しください。

堀内 最近の調査研究によると、黒部川流域の環境は非常にユニークであることが分かっています。例えば、上流地域には、氷河の痕跡である「カール地形」が分布しているほか、

その中には日本で唯一の氷河が残存していることが明らかになりました。加えて、黒部川流域には日本最古の鉱物と、世界一若い花崗岩が共存していることも分かりました。

自分たちが住んでいる、この極めて珍しい地域特性を、地球規模の環境の中で明らかにし、それをうまくストーリーに乗せて発信したい。その観点から、来年の「日本ジオパーク」の認定に向けて努力しているところ。ゆくゆくは市民のまちに対する誇りや愛着にもつなげていきたいし、観光振興にも結び付けていきたいと考えています。

松本 神崎市が現在目指しているのは「日本史が学べるまちづくり」。市内には吉野ヶ里遺跡や姉川城、そして水と密接な生活風土など、さまざまな歴史的資源があります。こうした資源を含め、市全体を「屋根のない博物館」として、まちの歴史を総合的にアピールしていきたいですね。さらに地域を訪れる観光客が「自分のまちはどういう特徴があるのか、歴史があるのか」と、思いを巡らすことができるように、発信の仕方も工夫していければと考えています。

稲葉 水資源は環境の重要なバロメーターです。これからも多くの市民と思いを共有し、水環境の保全に向けて努力していきたい。そして、小金井市ならではの美しい環境を次の世代に継承していきたいと思っています。

細川 市民を巻き込んだ環境浄化運動、水資源を生かした観光振興、特産品の開発などの商工業の振興、そして、

歴史的風土と結びつけたまちづくり。名水、清流は、さまざまな施策や要素と多面的に結び付き合った、裾野が広い資源であることが、お話を聞きながら改めて理解できました。同時に、そうしたさまざまな取り組みがあつてこそ、名水、清流というものが生きてくるのだと思います。

今後とも、市民とともに、貴重な資源である名水、清流を守りながら、有効に活用されることを願っています。本日はどうもありがとうございました。

(平成25年4月10日、日本都市センター会館にて実施)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は7月号に掲載予定です。

